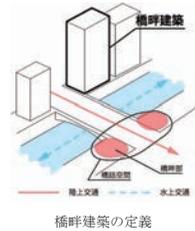


# Tokyo Linkage Plaza

## 都区部における舟運の再高度化を見据えた橋畔建築の建ち方

近年、東京都心部の運河や河川を、観光や交通の観点から見直し、舟運としての利用を再高度化する試みが見られる。これらの試みには、陸上交通網の混雑を緩和する代替輸送手段としての期待が掛かる一方で、そのゆったりとした速度から遊覧や納涼などのアクティビティが組み合わされて、河川上の空間を場として楽しむという側面もみられる。こうしたアクティビティの側面は、陸上交通網を主として発展した都市空間の近代化においては、首都高速道路の高架橋に蓋をされるなど、道路の裏側として隠されてきた運河・河川上の空間を、もう一度、都市空間の魅力的な空地として捉え直す取り組みも見える。したがってこの舟運の再高度化は、輸送手段の効率や人のアクティビティによる賑わいだけでなく、都市での建築形態がつくる表・裏に、条件からの変更を迫る一大プロジェクトでもある。この河川沿いの線状の都市形態が、今後十年もかけてつくられていくことを考えると、その起点となる場所は、道と川に挟まれた街区の端部、つまり橋畔部であると考えた。本計画では、こうした橋の袂で街区の角を形成する建物を橋畔建築と呼び(図3)、これに求められる性格の導出と、建て方の検討、それらを用いたいくつかの事例の提案を通して、運河・河川上の空地での新たな空間体験を創出することを目的とする。



### 2. 橋畔建築と橋詰空間

まず橋畔部が、これまでどのように都市空間の中で位置付けられ、使われてきたのかを知るために、橋畔部とそれを含む橋の袂の橋詰空間の変遷と現状について、文献調査と実路調査を行った。

#### 2-1. 橋畔建築と橋詰空間の変遷

江戸時代には橋を延焼から防ぐために設けられたと言われる橋詰空間の様子、橋とともに多くの図録に残されている。日本橋では、中央を人の往来に空けているが、その脇に茶屋や屋台が建ち並び、他の橋では高札や番屋もみられるなど、人の集う広場のような性格が認められる。時代を経て、明治大正期の写真では、本橋は鉄橋やコンクリート橋へと変わっている。自動車や電車の都市空間への登場から、橋の中央が、人の場所から自動車や路面電車の場所へと映る変わったのに伴い、橋詰空間での人の集う場は道の両側、つまり橋畔部に振り分けられ、限定されている。また、陸上交通に合わせて、つくり変えられた橋と橋詰空間によって、舟運との関わりを見出すことは難しくなっている。



橋詰空間の変遷

#### 2-2. 橋畔建築と橋詰空間の現状

前節の変遷を踏まえた上で、現代の橋畔建築と橋詰空間がどのように都市空間の中で扱われ、使われているのかを知るために、皇居北東の日本橋川、西外堀、神田川を中心として、そこから分岐される日本橋川、亀島川を調査の対象範囲として、橋梁52本208橋畔部の実路調査を行った。橋畔部の使われ方では、公園、公衆トイレ、交番とするものが規範化しており多くみられるが、特徴的なものとしては、首都高速道路の入り口、社や石碑、石垣跡などの歴史的記念碑、駐輪場、観光案内所などもみられた。また、既存の橋畔建築としては、先の例の他に、飲食店舗や屋形船の乗船場がみられたが、陸側と水側で立面の高さが異なり、水側からは塔のように見える特徴がみられた。



### 3. 橋畔建築に求められる五つの性格と五つの設計手法

ここでは前章で収集した事例の整理から、橋畔建築に求められてきた、またこれから求められる性格を類推し、それを具現化する設計手法の整理を試みる。

#### 橋畔建築に求められる五つの性格

先行事例にみられた用途や対象の組み合わせを再検討し、そこに求められた性格を類推し、整理した(図6)。



まず情報共有性として、観光案内所や看板、歴史的には高札場など、橋詰空間、橋畔建築には、たくさんの人々が情報を共有する場として働いてきたことがあげられる。

次に律動祝祭性として、万世橋の橋畔部の事例のように、毎日ではないが、ある周期で祝祭の空間へと変容することがあげられる。



また空間開放性として、数少ない橋畔建築の作品事例のTIME'Sのように、観水テラスを設け、河川上にもそよ風に対して開放性を備えている。

さらに生態順応性として、橋畔部を公園とする例で、樹木によって木陰を提供するとともに、今後の水質改善など、一度切り離された水と陸を、生態学的な視点でつなぎ直すことが求められるであろう。

最後に非占有華奢性として、橋畔部は陸と水の立体的な注としての役割を担い、建物や用途に占有され尽くすことは少ないながらも、屋台や仮設の構築物によって賑わいをつくりだしてきたことがあげられる。

#### 五つの性格を具現化する五つの設計手法

前節の五つの性格を、都区部橋畔部の敷地環境とのあいだでその具現化を検討し、共通する手法を導いた(図7)。



まず、橋畔部に関わる建築用語として注4)、既に生態順応性に関わる橋畔植栽

情報共有性や律動祝祭性に関わると考えられる橋塔がみられた。

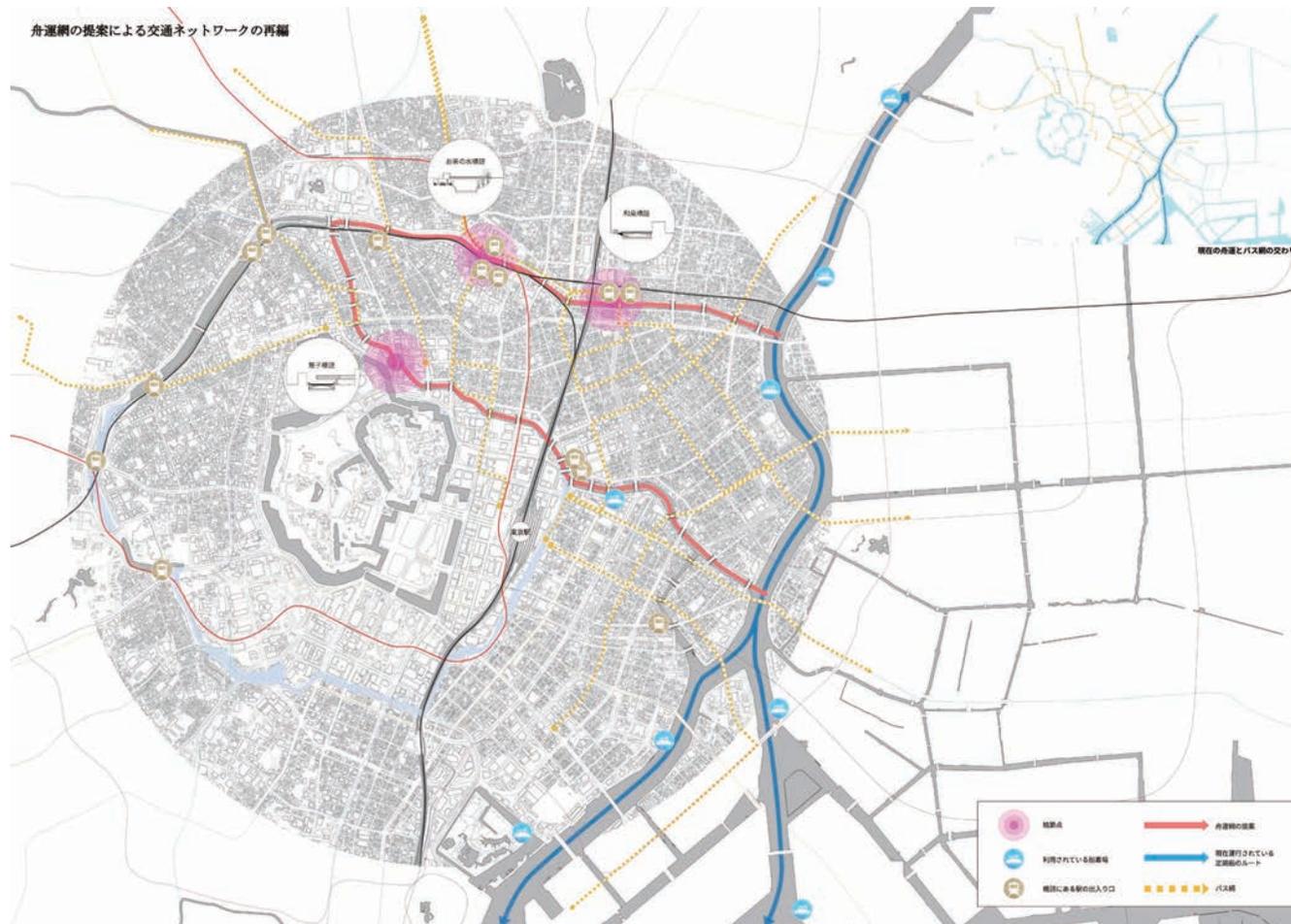
非占有華奢性に関わるイベントなどに対応する仮設空間、

情報共有性や空間開放性に関わり内外をつなぐ虚境界面

### 4. Tokyo Linkage Plaza

以上の検討を踏まえ、他交通との交差、川の幅や曲がるといった形態的特徴、水面と橋上の道路面との高低差といった条件の異なる場所を探索し、お茶の水橋詰、雑子橋詰、和泉橋詰の三箇所を計画地として選定した

#### 舟運網の提案による交通ネットワークの再編

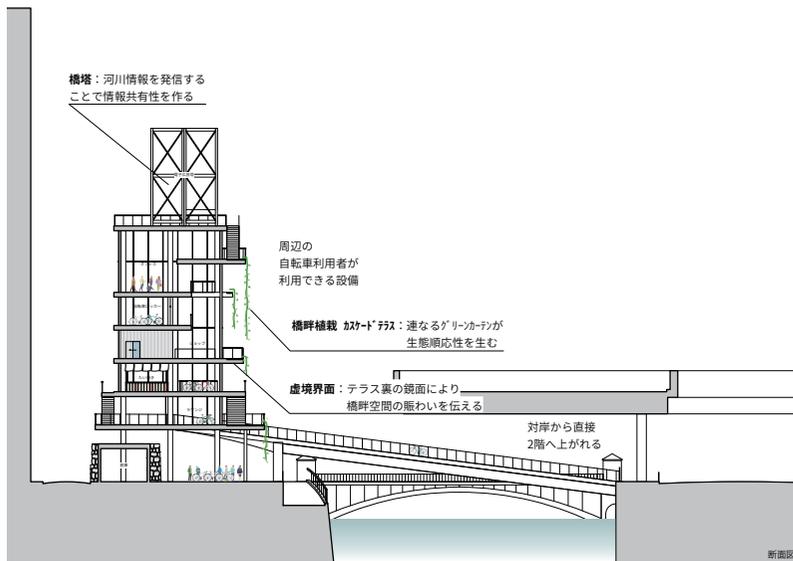
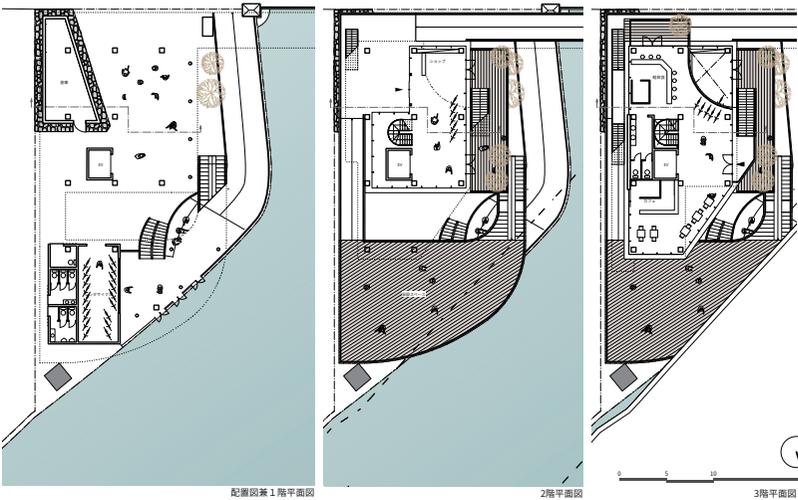
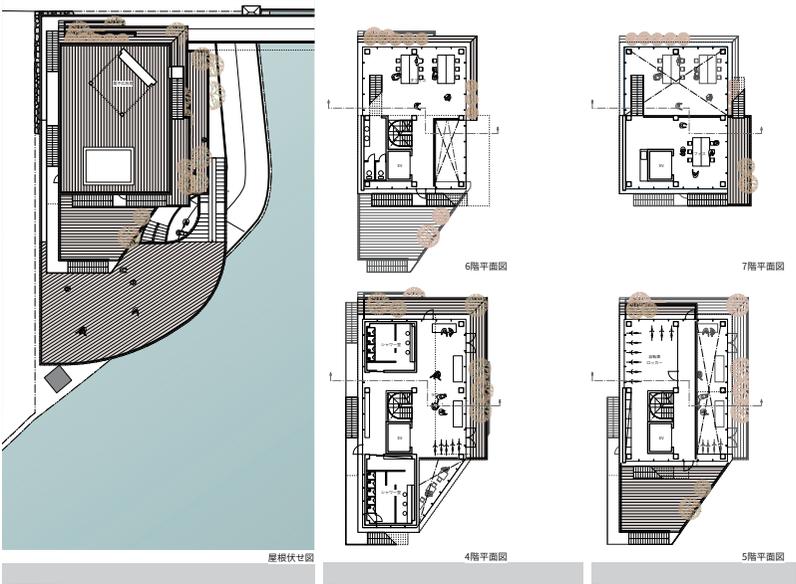




# 雉子橋詰: 舟運とつながるサイクリステーション

水面と橋上道路の高低差が4mと比較的小さく、川の曲がる角となる雉子橋詰では、舟運とともに近年注目される自転車交通との乗り換え拠点を計画した。対岸から建物2階へ至る自転車スロープ橋を、首都高速道路高架と水面の間に新たに渡し、船の動きと立体的に直行させることで、乗り物による都市のダイナミックな動きが感じられるようにした。テラスからはツタ科の植物が垂らされるとともに、テラス下面を鏡面仕上げることにより、その反射によって水上の賑わいも建物内部で感じられる、オーヴァーラップによる虚ろな境界を設計した。

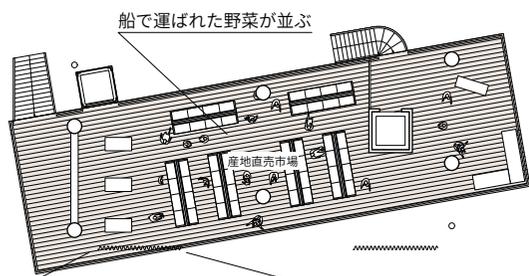
## 敷地概要



# 和泉橋詰:反り上がり屋根のかかる産地直送市場

河口に近く河川幅の広い和泉橋詰では、舟運による物流網の復活を見越し、産地直送品を扱う市場を計画した。また秋葉原のアイドル文化との関係から、その一部に屋外ライブに対応した階段状の劇場を設けている。河口付近の幅広の水面に合わせてように低層で長い反り屋根の建物としたが、周囲の建物に埋没しないように一部の屋根の棟を、塔状に迫り上げた。その屋根下は半外部空間で、産地直送品のマルシェが毎日開催される。河川側にはカーテンを設置し、風の動きを波打つ壁で表す境界面を作り出し、近づく東京湾に向けての高揚感を生み出している。

## 敷地概要



カーテン：傾いたスラブが  
河川上に広がりを作る

虚境界面：カーテンが緩やかな境界を作る

2階平面図

